報告

知覚の変化を指標とした皮膚鍼療法の 効果判定について

白 畠 庸*

I はじめに

物質文明の発達と、社会機構の複雑化、並びに生活環境の多様化によって、最近特に「心身症」とみなされる疾患、あるいは症候群が増加した。その中でも、学童時から思春期にかけての子供達に、喘息や夜尿症などが増えつつあるが、たまたま私は過去2年ほどの間に、いわゆる「思春期夜尿症」と思われる患者(16名)を治療する機会を得た。そしてその中に、皮膚知覚が異常に亢進している症例を多くみた。しかも、その多くのものが知覚異常の消長と、夜尿症治療との間にきわめて高い相関性を示したので、ここに報告する。

II 治療結果

ここにあげる思春期夜尿症患者は、男子7名、女子3名、計10名である。年齢は、12~16歳で、これらの患者に共通する点は、脊髓両側、特に腰仙部、膝窩、下腹部、それに大腿、下腿の内側に著明な疼痛性の知覚過敏をあらわすことであった。したがって治療の初期には、普通鍼はもちろん皮膚鍼の針先を皮膚に触れさすことができず、鍼管や、鍼柄、あるいは皮膚鍼の柄で、軽く皮膚表面を擦過する程度に止めなければならなかった。この様な状態であったので、患者達自身は最初から治療に対して消極的であったが、親の説得によってなんとか治療を継続することができた。患者達は、塾やおけいこ事に通っている関係から、週1, 2回の治療がやっとであった。それでも3~5回治療するうちに、知覚の異常な亢進状態が徐々に緩和され、それと符合する様に夜尿の回数も減りはじめ、7回から9回の治療を行った段階では、

皮膚鍼だけではなく、患部の要穴、たとえば腎俞、上髎、次髎、委中、三陰交などの普通鍼も、行なえるようになった。そして、平均12回の治療で、全症例において知覚異常と、夜尿がほぼ無くなった。

III 考 察

前に記した様に、この種の患者は心身症傾向を示すと共に、自律神経系に過敏状態を来しておりその為に多種の不定愁訴を訴えると共に、心理的にもイライラやうつ状態が目立つ。又、皮膚表面にも、乾燥、湿潤、贅毛、陷下、硬結などの変化が著しい。それらは自律神経、特に交感神経の異常な緊張状態によって引き起こされる現象であり、それと同時に、皮膚知覚の異常に亢進しているものと考えられる。又、排尿機能は下位レベルでは、仙髄の副交感神経によって促進され、交感神経によっては、むしろ抑制される。又、上位レベルでは、視床下部並びに、橋前部によって調節されるが、当然大脳皮質からの調節作用が働く

排尿の神経性調節

* Isao SHIRAHATA 東邦大学医学部麻酔科学研究所

氏 名	年齢	症 状	治療回数	効 果
○中○子(女)	13歳	●毎夜一回 ●下腹に過敏あり	10回	●夜尿は失くなり、過敏状態も改善された。
○内○恵(女)	14歳	●3日に一回程度 ●仙骨部にわずかの過敏あり	9回	●夜尿・過敏共に完治
○野○代(女)	15歳	●2～3日に一回程度 ●腰仙部の広範囲にわたる過敏	16回	●夜尿・過敏共に完治
○田○夫(男)	13歳	●毎夜一回 ●腰臀部の過敏高度	12回	●夜尿は週一回程度に改善 ●過敏は完治
○岡○輝(男)	14歳	●2日に一回程度 ●肩甲間部から腰部にかけて過敏	10回	●夜尿・過敏共に完治
○井○吾(男)	16歳	●2日に一回程度 ●下背部に過敏	11回	●夜尿・過敏共に完治
○高○一(男)	13歳	●毎夜二回程度 ●腰仙部と大腿内側に強い過敏	17回	●夜尿は週一度に改善 ●過敏もやや改善
○野○次(男)	15歳	●毎夜一回 ●背腰部にわずかな過敏	13回	●夜尿は週一度に改善 ●過敏は完治
○本○輝(男)	15歳	●毎夜一回 ●うなじから腰部にかけて過敏	15回	●夜尿は完治 ●過敏は改善
○山○男(男)	16歳	●3日に一回程度 ●大腿から下腿内側にかけて過敏	16回	●夜尿は完治 ●過敏は改善

※全症例に対する治療法は後頸部から仙骨部にかけての脊柱両側・臀部・下腿後側・下腹部・大腿・下腿の内側に対する皮膚鍼

ことは言うまでもない。それでは交感神経の異状緊張と考えられる、疼痛性知覚異状と、夜尿との関係の結びつきは、はっきりとしない点が多々あるが、内臓から脊髄後根に入る体性神経反射路の中に、特に交感神経系の求心性繊維が多数含まれていることは事実であり、何らかのストレスにおいて、行為中枢である大脳皮質や、視床下部並びに橋前部の統合機能に歪みが起こり、その結果、下位中枢である仙髄神経のバランスが壊れ、さらには当然、下垂体後葉ホルモンの分泌異状などがあって、膀胱壁平滑筋並びに活躍筋の興奮性の異状と、機能の低下を来とし、夜尿と言う現象を引き起こしたのであろう。そしてその結果、交感神経求心路を通して来た、内臓からの異状刺激は、交感神経反射弓を介して、体表面に諸種の異状をあらわしたものであろう。

Ⅳ 結 語

古来、鍼刺激がこの種の疾患に著効をあらわすことは、周知のところであり、思春期夜尿症も又心身症的要素が高く、その為に単純で非特異的な皮膚鍼の刺激が、交感神経系を介して有効に作用

するものと考えられる。

又、そのリズムカルな刺激は、患者の心理面にも影響を与え、暗示効果を高めるのに役立つと共に、ホルモンや、神経刺激伝達物質系にも良好に作用するものと考えられる。

(〒616 京都市右京区嵯峨折戸町27)